

萬葉集 四



日本古典文學

日本古典文學大系 7

萬葉集 四

高木市之助
五味智英校注
大野晋

岩波書店刊行

萬葉集 四

日本古典文学大系 7

昭和 37 年 5 月 7 日 第 1 刷 発行 ©
昭和 51 年 3 月 10 日 第 17 刷 発行

定価 2100 円

校注者 高木市之助
五味智英
大野晋



発行者 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5
岩波雄二郎

印刷者 東京都青梅市根ヶ布 1-385
白井倉之助

発行所 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5 株式会社 岩波書店

落丁本・乱丁本はお取替いたします

目次

解 説	三
各巻の解説	一六
校注の覚え書	二六
凡 例	四七
卷十五	四九
卷十六	一一
卷十七	一六
卷十八	二四
卷十九	三一
卷二十	三九
補 注	四八
異体字表	五〇

解 説

第四冊の解説は先行各冊のそれとのつながりもあって、主として大伴旅人・家持及び坂上郎女を主軸とする大伴一族に係りたいと思う。といっても一族と万葉集との関係はかなり複雑で、このような限られたスペースの中で委曲を尽すことは困難なので、解説はせいぜいこうした関係のいわば概括的要約に終らざるを得まい。

万葉集作者として大伴氏一族が集中に占める位置はすこぶる重要で他の氏族のそれとは比較にならない。一族中作歌が集中に収載されて、いわゆる万葉歌人と呼ばれる人々は概算三十人を超え、更に作者ではなくとも集中にその名が見える者、はつきり大伴氏とは呼ばれずともほぼ一族に準じて差支なさそうな人々を加えると、万葉関係の一族は更に広がるであろう。次に万葉集中に収録される大伴氏一族の人々の作歌は、累計七百六十余首を算し、大まかに言って、万葉所収全歌数四千五百余首の殆んど一七％に及ぶであろう。

以上は大伴一族の万葉集における数量的な拡がりであるが、こうした拡がりの中からわれわれは前掲三人の主要作家、旅人・家持並びに坂上郎女を挙げたい。尤も本冊で大伴家におけるこの三人を選び出すことは、第二冊で人麿・赤人及び憶良を、日本文学が創造し得た、また得る、基本的人間像として万葉集から選び出したのと必ずしも同じ意味ではない。

大伴旅人は由緒正しい名門大伴氏の氏の上である。大伴氏の系譜は遠く神話時代に溯ることが出来、天孫降臨に随った天忍日命を祖とし、その三世の孫道臣命は神武天皇の東征に際して数々の武勲を建てた家柄で、氏に関する記述は記紀を

賑わしている。尤もこうした伝承の中で、神話と史実をふり別けることは困難であるが、大伴氏がこれらの伝承を負う名族として皇室の信頼を受けていたことは事実であり、一族がこの事実を誇りとして代々皇室に忠誠を励んだこともほぼ疑いなかろう。尤も紀に随えば欽明以後、蘇我・物部両氏の時代が現出し、爾来大伴氏には往年の勢力はなく、政權の上では第一線から遠ざかったが、壬申の乱が起ると、大伴氏は天武天皇方として武勲を建てたので、乱後における、御行・安磨らを棟梁とする一族は、ほぼ往時の権勢と繁栄をとり戻したかに見えたが、一方大化改新以来擡頭して来た新興藤原氏の権勢の前には結局屈服する外はなかったのである。

以上は旅人ら三人の文学を理解するために必要な大伴氏一族の伝承隆替に関する、最小限の紹介であろう。

旅人が父安磨の薨後、一族の棟梁となったのは、五十歳、和銅七年の事で、爾来天平三年七月に六十七歳で薨するまで官位はほぼ順当に累進したという外はないが、そうした経歴も彼の歌人としての創造的生活に結びつけて考える時、それは順当などと言いつても切れない屈折や変化を帯びて来ることを否定出来ない。尤も万葉集中に求め得る彼の八十首足らずの作歌は、少数例外を除けば、彼が大宰帥として任地にあった時と、並びに引き続き帰京後の一年足らずの制作にかかっているから、この大伴家の代表的歌人を語るに、直接にまた特別に重要なのは晩年数年間の経歴でしかないかも知れない。（尤もそれ以前の作は作者名を欠く諸巻の中に入っているのではないかと疑う、故武田祐吉氏のような学者もあるが。）

旅人の大宰府生活は統紀に記載が漏れていて正確な年月は明らかでないが、万葉集所収歌の題詞・左注その他によって勘案すれば、神亀四年の末から五年の初めにかけての事と推測され、たとえ彼の任命には何ら左遷の意味が無かったとしても、これと前後して藤原氏の側に光明子の皇子誕生、引き続き立太子などという、盛事があった以上、『天ぎかるひ、なへ』の赴任が彼の憂鬱を誘わなかったとは言いつても切れない。更に着任後いくばくもなく神亀五年の夏に、彼は妻大伴郎女を任

地で喪い、その夏には脚に瘡を患ってかなりの重態だったらしく、これらの出来事もおそらく彼の大宰府生活に重圧を加えたに相違ない。一方その頃、京では長屋王の事件があつて、皇室家の政治の中心である王を自尽せしめた事は、旅人のライヴァルである藤原三兄弟のために政權獲得の路を拓いたことでしかなかった。これら旅人をめぐる任地身辺の出来事や京における政情の変化は、彼の詩情を動かしたに相違なく、われわれは例えば巻五巻頭の挽歌や巻三所収の讃酒歌の連作などの制作の直接の要因として、これらの出来事を考え得るばかりでなく、観梅の宴の開催や、玉島川畔の遊覧の背後にも、われわれは容易に彼の憂愁の曇りを感じずにはいられない。ただし、彼の作歌がこのような彼の大宰府生活の憂愁を宿しているところにその性格があるとするのは、当らない。性格はむしろ却つてその逆である。彼はこのように深刻な氏族的な重圧にしても、或は個人的な現実の孤独感にしても、それをそのようなものとしてではなく、むしろ飄渺淡淡とした高踏的なものとして受けとめているのであつて、このような抒情的な詩精神による造型こそ、彼の作歌を一貫する何よりの性格でなくてはならない。（旅人については五味智英「大伴旅人序説」——万葉集大成10作家研究篇所収——を参考とした。なお本大系第一冊一九頁にも第三期を解説するに際して旅人に言及している。）

坂上郎女は旅人の異母妹、したがつて家持の叔母に当り、経歴については女性のせいもあつて正史に所見はないが、万葉集所収歌の題詞・左注で補い得ることは旅人の場合と同じである。作歌はその数量においては旅人にまさり、大伴一族中では家持について第二位、また万葉作者全体を通じて、人麿には及ばないが、憶良に匹敵し、赤人にまさる程度に多作である。年齢ははつきりしないが、初め天武天皇第五皇子の穗積親王に嫁し、親王の死後藤原不比等の第四子麿、異母兄宿奈麿、従兄弟安部蟲麿らとの関係から推すことによつてはば見当はつく。神龜五年大宰府で旅人の妻が死ぬと、多分家持ら三兄の養育などのために旅人の許に下向し、そこでは一族の大宰大監百代と相聞の贈答があつたりするが、後年の

家持との、叔母というよりも養母に近い親近關係はこの時期に生じたものといえよう。天平二年十一月旅人に先立って歸京し、翌天平三年旅人の死後は大伴宗家の佐保郎を主な根拠として、大伴家婦人の長老として重きをなすと共に、家持以下の旅人の遺児や自身の娘の大嬢や弟嬢を育て、時には蟲麿や駿河麿に対しては相聞的感情もまだ全く忘れ去ってはいなかったらしい。没年は不明であるが、彼女に對する家持の挽歌がないところを見ると、家持の作歌の下限である天平宝字三年までかなりの高齢で生存していただろうと推定する尾山篤二郎氏の説に隨うべきであろうか。

郎女の作歌の性格はいささか複雑である。集中の女流歌人は原則として戀愛をうたっており、中でも出色の作として比較的高く評價される代表歌人の代表作といえは、殆んどがそうした情熱的な相聞歌に限られている。額田王の天武天皇との唱和(卷一、二〇—三二)、笠女郎の家持に贈った二十数首(卷三、三五—三七・卷四、五七—六〇)、狭野茅上娘子の中臣宅守との贈答(卷十五、後半)等々。ところが郎女の作品はその例外である。前述の諸作に見るような、烈々たる熱情は殆んどうたわれていない。(怨恨の歌(卷四、六九—六〇)をそれに擬する考え方もあるが。)尤もそれは郎女の本来の性格ではなくて、その経歴がそうさせたともいわれなくはない。この辺の煩瑣な事情をここで細かに説明することはむづかしいが、要するに彼女の長期に亘る相聞遍歴が正常純粋な恋ごころを生み出す上にふさわしくなかったことは認めるにしても、ただそれだけで相聞歌における彼女の例外性を割り切るわけには行かないのであって、そこにはそのように烈しい相聞歌の開花を妨げるものが、彼女本来の性格の中に存在した筈で、それこそが逆に言って、彼女の作品の積極的な特性として求められなくてはならないものではないかと思われる。このように考えて行つて、われわれは集中の他の有名な女性歌人の諸作には見られなかった別の女人像が郎女の諸作によって形成されていることに気付かざるを得ない。彼女がさも彼女らしい手法によって描き出す自画像は、短歌の制約を受けながらも、著しく知性を帯びている。この点前記、笠女郎や茅上娘子の

名歌と言われる諸作とはよかれあしかれ異質であつて、世間知らずに、或は世間を拒否してひたむきに水火の中に飛び込もうとする、命がけの生娘を描き出すには不適当であるが、その代り上流階層の教養と才氣を身につけ、高踏的ではあつても常識は逸脱せず、恋は恋しても無分別は避けようとする、いわば当時の官人社会の平均女人的自画像は、まざまざと描き得ていると言えよう。彼女の相聞歌が、相手が誰であつても、常に相聞というにはあまりにも社交的であり過ぎるとは、彼女の作歌への共通の批判のようであるが、それは万葉女人の代表的相聞歌に比較した場合の郎女の相聞歌の弱さを語ると同時に、そのまま彼女の作歌の特徴として、一般万葉女人に遍在する人間像を描き得ている点を推し得るのではないか。なお郎女の作歌については、本大系第一冊二二頁に、第四期を解説するに当つて言及されている。

最後に大伴家持は、旅人の長男、坂上郎女の甥で、大伴一族の棟梁として、その経歴は続日本紀や公卿補任などに見えてかなり詳しいが、相互前後に矛盾があつたりして必ずしも確定的ではなく、集中の題詞や左注によつて補正を要するものと先行の二人の場合と同様である。家持の作歌はその数量において、長歌四十六首、短歌四百三十一首（反歌を含めて）、別に連歌一首、旋頭歌一首、計四百七十九首に達し、大伴一族作歌計約七百六十余首の六割強を占め、集中主要作家に比べて、赤人の十倍、憶良の六倍、そして人麿の場合は、仮りに人麿歌集の歌全部を人麿作と考えてみても、なお且つこれを凌駕する有様である。尤もこの事実はずしも家持の作歌の優秀性を証することにはならないが、ただし彼の作歌の、このように圧倒的な数量はよかれあしかれ万葉集そのものの性格をそれほど大きく規制していることだけはまちがいない。家持の七十年の生涯（年齢については諸説があるが、一往尾山篤二郎氏の「大伴家持の研究」の中の「大伴家持年譜」に拠ることとした）は、研究者によつて三期または五期に分けられる。久松潜一氏による五期の区分を掲げると左の通りである。

第一期 少年時代 養老元年（七一七）―天平四年（七三二） 誕生―十六歳

第二期 青春時代 天平五年(七三三)―天平十八年(七四六) 十七歳―三十歳

第三期 越中守時代 天平十八年(七四六)―天平勝宝三年(七五二) 三十歳―三十五歳

第四期 兵部省時代 天平勝宝三年(七五二)―天平宝字三年(七五九) 三十五歳―四十三歳

第五期 晚年時代 天平宝字三年(七五九)―延暦四年(七八五) 四十三歳―死亡 (年齢は久松氏の推算による)

尤も五期中彼の作歌が万葉集中に求められるのは第二期から第四期までの間で、第一期には殆んど求められないし(「殆んど」といったのは卷八、作期不明の彼の作に天平四年作かと疑われるものがあるから)、万葉集最後の作を家持第四期の作の下限ときめる以上、万葉集中に第五期の作歌が求められないのは当然である。家持の少年時代の経歴は明らかでないが、その一部を父旅人と共に大宰府で暮したことは万葉集卷四の「吾不_レ吾_レ七_ノ左注」によって分るが、彼のその頃の暮しの実態については全く不明である。父の旅人が当時六十余歳に達していた事はまちがいなく、この老父が大宰府で失った夫人大伴郎女が、家持の実母でなかった事はほぼ推察されるが、実母については素姓もあいまいで、ただ彼女が家持やその弟の書持と共に旅人に従って大宰府に下り、そこでまた一女留女を生んだと想像されるだけである。(尾山篤二郎氏「大伴家持の母の研究」に拠る。) なお大伴郎女の死後は坂上郎女も下向して家持らの養育に参じたのであるから(前記)、この名族の少年が老父・実母・叔母の愛育の下に不幸だったとは想像出来ない。和歌との関連についても万葉集にその頃の彼の作と目せられる実例を探し出すことは出来なくとも、彼を囲んだ大宰府の公私の環境が、彼の後来の歌人的生涯を築くための誠によき基盤となり得たことだけは疑い得ないところであらう。

第二期は、年齢でいって十七、八歳から三十歳まで、官職でいえば内舍人時代、歌人的生涯からいえば、相聞往来歌を中心とする段階である。この期の作歌百六十余首の長短歌の中、相聞歌は九十余首にも及んでいるが、これら贈答歌の相

手は嫡妻坂上大嬢は別としても、山口女王をはじめ、郎女・娘子・童女ら有名無名の各身分段階に亘っており、舞台も奈良・恭仁の両都に跨り、その筋のヴェテランと言える。尤も彼の相聞歌には数量の割合に卓れた作歌が乏しいと言われるが、その点やがて当時の青年官人達の平凡な相聞歌そのものを代表している観がある。

第三期は彼の越中守時代にあたり、年齢では三十歳から三十五歳にあたるおよそ五年間を占め、期間は短いが、制作欲は比較的旺盛で、したがって質量共に前後の兩期を凌駕すると言われる。前期が相聞往来歌を中心としているのに対して、この期はむしろ任地の風土に取材した対自然の作や、国守として公私の生活をうたった作が多く、北国の自然は家持にとってそれまで住み慣れた大和地方のそれに比べて著しく印象的だったであろうし、地方長官としての初度の経験も中央における在来の相聞生活に比べて新しい興味を与えたい。ただそれにしては有名な五賦における二上山・布勢水海・立山などの景觀の描出をはじめとして、とかく新味に乏しい嫌があるが、そこにわれわれは家持作歌の或る限界のあったことを認めなくてはなるまい。

第四期は越中から京に帰って以後、年齢では三十五歳から四十三歳に至る七、八年間であって、作歌数は前期に比して少ないが、それはそのまま彼の創作力の後退を語るとは限らない。たとえば巻十九の巻末の三首(四二五)―(四二六)には彼独自の氣分的な抒情がうたわれ、同時に、そこには万葉から平安文学への新しい方向が拓かれているという意味もあって、誰でも高い評価を惜しまないが、考えようでは、青春時代の純粹な相聞往来歌にも見られず、また越中守時代ののきな対自然歌にも見られなかった、大伴氏の氏上としての、自族の没落への感懷といったようなものが、このうっとうしさを生み出したといわれなくもなく、巻二十で彼が兵部少輔として防人と共にうたい上げる自族激励の詩的緊張とも表裏して微妙に響きあうところに、家持の作歌の今日知り得る限りにおける一つの頂点があったと解することも出来よう。

第五の晩年時代も歌人家持と無関係ではない。尤も前述のように万葉集所収の最後の歌は年代の明らかなものとしては家持の作に係る天平宝字三年正月の賜饗の歌であり、この歌で家持の第四期を区分したのであるから、第五期の彼の歌が万葉に求められる筈もなく、したがって形式的に言って歌人家持は万葉で終り、以後は歌を持たない家持ということになるわけである。しかし前に述べたように、まだ歌を持たなかった少年家持も後年の歌人的生涯の基盤として考えなくてはならないなら、同じように歌を持たなくなった晩年の彼も歌人家持の行方として考えて見なくてはならない筈である。一体、因幡守以後の家持が歌を詠んだかどうかという事も問題である。万葉集に家持の作歌が見出せないからといって、すぐに彼が晩年作歌の道を放棄したときめてかかる事は早計である。年譜を繰ってみても、彼の身辺は中々多端であって、彼はその後も諸国の国守や按察使・持節征東將軍などに任せられ、京官としても民部少輔・同大輔・参議・東宮大夫・中納言等に歴任し、その間大伴一族が数次の反乱に関係した跡も見えるのだから、第四期の例から推せば一族を論し、または一族の衰運を嘆く歌などが作られても不思議はない。だのに彼の歌日記風の記述が万葉集と共にここで終っているのは、作歌そのものの断絶か、それとも資料の湮滅か、前者なら、一人の歌人の生涯として大きな問題を提出するし、後者なら、彼の歌が失われた資料の中でどのように進展乃至衰退したかという別の新しい問題が議せられなくてはならず、要するに第五期の家持が現在作歌を持たないということはそれ自身歌人家持の問題である。

さて以上われわれは旅人・坂上郎女・家持の三人についてそれぞれ万葉集のすぐれた歌人として紹介して来た。いってみれば、第二冊において人麿・赤人・憶良に対して試みたとはぼ同じ規準に随ったまでである。もちろん私はこのような態度を誤っているとは思わない。三人は前の三人(第二冊の解説で試みた人麿・赤人・憶良の三人を指す。以下しばらくこういう

言い方をゆるして頂きたい)を解説するに先立って、「三人共通に言えること」として述べた条件にほぼ準ずる資格を具えていると言うことができ、特にそこでこの前の三人をこれに先行する初期皇室歌人群と比べて、この歌人群の未熟さと乏しさが前の三人で克服されたことを言ったが、同様のことはこの三人にも該当すると思われるからである(第二冊解説八一〇頁)。ただし、ここで三人をとりあげたのは単にそれだけの理由ではない。以下このことについて多少の言葉を費すことによって、以上三人の解説を結びたい。

第三冊で、われわれ(といっても校注者に必ずしも共通ではないかも知れないが)は、作者不明歌の一段階として巻十・十一・十二などの所収歌を解説するに当って、それらが類歌性によって、いわば段階的に作者明示歌(第二冊でいえば乙類

作 者	A 全歌数 (長旋廻)	B A 万全	C 類歌数	D C A	E 巻十・十一・十二中のC	F E C
旅 人	七九	・〇一七	一二	・一五	六	・五〇
坂上郎女	八五	・〇一九	二一	・二五	一八	・八六
家 持	四七九	・二一	九三	・二〇	四二	・四五
計(平均)	六四三	・一四	一二六	・二〇	六六	・五一

注1 「万全」は万葉集全歌数。A_{万全}とは本表Aの「万全」に対する比の意(以下同じ)。

注2 表の数字は細部に亘って不動のものではない。まず類歌性をどこまで認めるかが決定的ではない。本表は佐佐木信綱先生著、万葉集の研究第三、万葉集類歌類句攷(昭和二十三年七月岩波書店発行)を根拠にし、これを私見をもって多少変更したものによって集計したのであるが、今これらの変更を一々ことわる余裕がないし、ことわったところで見ると人々の見解によって更に多少の訂正を要するであろうことは、類歌性そのものの性質上已むを得ない。それに、そのような多少の動きによって以下の論述が動揺する虞もなさそうなので、あえてこのような表を作ってみた次第である。

歌へ連続することを説明したが、この類歌性はやがて三人の作歌へもつながって行くのである。三人の作歌における類歌性を求めるとはば前頁の表のような集計になる。

さて先ず右の表によって知り得ることは、第三冊で解説の対象となった作者不明歌の中の、甲群特に卷十・十一・十二の所収歌と、この大伴家一族の三代表歌人の作歌との間に類歌的關係が濃厚なことである。こうした關係は三卷の性格でもあったが(第三冊各卷の解説等参照)、同時に大伴家一族の三人の性格としてとりあげることも可能なのである。即ち右の表に随えば、三人の、万葉集全歌数の一割四分にも達する彼らの作歌の中には、類歌性(類歌性については、第三冊解説一一―一二頁を参照されたい)を持った歌が平均二割に達し、中でも坂上郎女作歌の場合は二割五分にも達することになる。ところで、このような三人の類歌關係は何によって生ずるか。よく言われるように三人が他人の作歌を模倣したということだけによって説明出来るであろうか。問題はそこにある。もしそうなら、三人は、特に坂上郎女、次いで家持などは前述して来たようなもろの個性的な特性があるにしても、その創作的能力は疑わしくなり、いつてみれば模倣に終始した、末流歌人と評価されても已むを得ないことになるであろう。そしてこうした見方は現に、学界・歌壇などである程度常識として認められているのだが、そのように片つけていいであろうか。そこに類歌性の問題が考えられるのである。詳しくは、卷十・十一・十二の作者不明歌を規制する類歌性が大伴氏一族の代表作家とも言われる三人の個性的な歌人にまでも連続しているという事実が一つの問題として考えられるのである。既に第三冊における各卷解説で指摘されているように、卷十以下三卷が何らかの分類意識によって集められていることや、所収歌が当代知識層の一般的水準の作を主とするものの多いことなどから、これらの卷々が、当時の歌人達が歌作の参考のために作った手控え乃至参考書類を基礎として手を加えたものであろうことを予想し得るが、右の表は、誰よりもこの三人こそが右の予想を裏書きすることを語っていると

いえるのであって、具体的にいえば、三人は、現在の万葉集の巻十・十一・十二か、またはこれに似た内容の手控え類を所持して、それらの所収歌との類歌的關係によって歌作していたことを、表のFの、坂上郎女八六%、家持四五%という高率が直接語っていると言えよう。(旅人の五〇%という率には、逆に旅人の作歌がそうした手控えに書き留められたかも知れず、したがってこの率の数字をそのまま信ずることには多少の不安があるかも知れない。)すなわち、類歌性という關係は第三冊の解説〔各巻の解説〕も含めてで示したように、作者不明歌の巻々の中で相互間をとり結ぶばかりでなく、集中の一流歌人、特に大伴家一族を代表する旅人・郎女・家持の場合にも彼らの作と巻十以下の無名作家の作とをとり結んでいるのである。尤も郎女の場合などには、まだ少女気のぬけきらぬ恋愛時代、いわば歌の勉強時代に、こうした自家用の古歌集を手本としてその名歌?を模倣し、それをそのまま藤原鷹へ贈ったという關係を考えることも出来る(屋敷頼雄氏他)。誠に尤もな想像であって、こういう修業時代の類歌關係は多分家持にもあったと思われるが、ただそれを表中の三人の作歌の類歌性全般に及ぼして考えることは出来まい。

とすれば、このような三大歌人の類歌性はどのように理解すべきであろうか。私はそこに、当時の作歌意識の或る一つの通性といったものを予想せざるを得ないのであって、彼らは一方において「山柿之門」などという用語(巻十七、三六六題詞)を使うことによって分るように、或る特定の作者の独自の個性を権威付けて尊重すると同時に、他方においては、類歌・類句を贈答相聞の作品の中に織り込み、作歌に等質性を与えることによって親近の愛情を通して楽しい交歓の具としていたのではないか。後代からすれば独創的個性の尊重と類歌性によるその否定とは当然矛盾するわけであるが、万葉を生み出したこの時代の、しかも独詠的創作に贈答的交歓歌を兼ねた世界においては必ずしもそうでなかった。そこには第三冊の解説でも触れたように、等質共感の民謡的世界から個性孤高の詩の世界へ昇華して行く連続の場があったので

ある。前述のように卷十以下のそれ自身頗る類歌的關係に富んだ三卷は、当時の官人社会の歌作の世界へ誠に恰好な手本を提供したけれども、同時に両者の關係は微妙複雑な共感的紐帶だったとも言え、現にその一つの実証として三卷の所収歌は三人の歌人へ類歌的につながっているのである。三人本位に言えば、彼らは一方において、第二冊で解説した、前の三人像、人麿・赤人・憶良に次ぐ個性的に大きな存在でもあり、また三人相互の間に大伴氏という珍らしく強靱な群像的存在を形成しながらも（この点詳説する機会を持たなかったが）、他方においては、主として律令制定の前後から急に新興して来た藤原一族に対抗しつつ、皇室を囲む支配層の一翼として、しかしながら、藤原から奈良へかけて衰退の一路をたどって行く大伴一族の運命を、独創的な個性というよりも逆に類歌的な親近性、共感的な紐帶性によって背負って行くところの、民謡性を内に含んだいわば類歌的歌手でもあったと言えるまいか。

最後に念の為に一言して置きたいことは、万葉集の成立編纂において果たした家持の重大な役割についてである。この事は既に第一冊解説三の「成立と編纂」で解かれていて、ここにくりかえす要もないが、ただこの節では、家持はその歌人的性格を考えるために、あまりにも旅人・坂上郎女に連続させられた嫌いがなくはない。万葉集そのもの（三人を含めて）は少なくとも彼なしには成立し得なかったこと、現に今このようにして、彼の歌を紹介すること自身彼の蒐集編纂という業績なしには出来なかったことをもう一度思い出して、彼の偉業をたたえて置きたいのである。

以上、第一冊以来、解説で書き次いで来た、いわば、序説的な部分だけをもう一度ここで要約すれば、大略次のようなことになるであろうか。

第一冊では万葉集の時代は、ほぼ古代国家成立の時代に相当するが、だからといって、集そのものの中には必ずしも支